

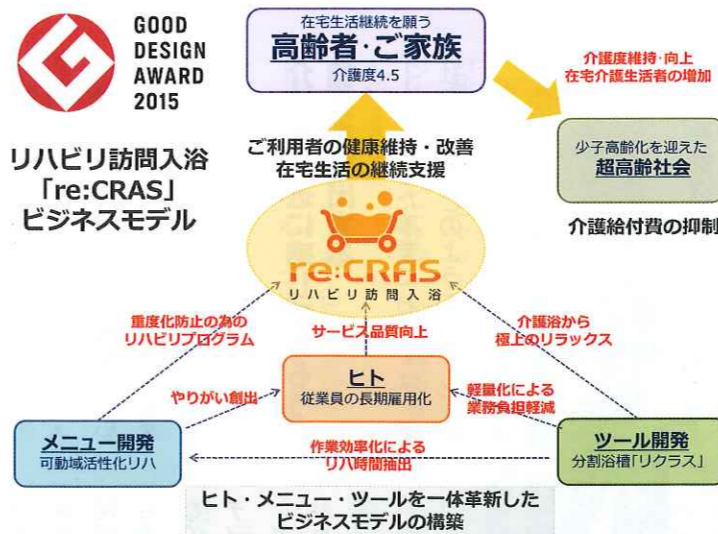
株式会社リクラス（イー・ライフ・グループ） リハビリ訪問入浴で グッドデザイン賞を受賞

リハビリデイサービス「nagomi」を運営するイー・ライフ・グループが、分社化して手がけたリハビリ訪問入浴「re:CRAS」のビジネスモデルが評価され、「2015年度グッドデザイン賞」(運営・公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞。これまでサービス内容の進化がさそった訪問入浴分野で革新を図った結果が実を結んだ。



株式会社リクラスの
福島良一代表取締役社長

【企業概要】
株式会社リクラス
〒171-0014
東京都豊島区池袋2-6-1 KDX池袋ビル8階
TEL: 03-5956-2362 FAX: 03-5956-2364
URL: http://re-cras.com



リハビリ効果を促進する設計となっている



可動域活性化プログラムを浴後に行う

浴槽をイチから開発 作業時間の短縮を実現

リハビリ訪問入浴「re:CRAS」は、通常の訪問入浴にリハビリプログラムを組み合わせたサービスだ。入浴中・後の温まってほぐれやすくなった状態でリハビリをするこゝとで身体拘縮防止などの効果を高める。最終的には、訪問入浴を卒業し、自宅やデイサービスのお風呂に入れるくらいまで利用者の状態を戻すことを目標に掲げる。2014年5月に都内に1店舗目をオープンし、現在2店舗でサービスを提供している。

サービス開始のきっかけを、株式会社リクラスの福島良一代表取締役社長はこう語る。

「介護保険導入時より、高齢者の数は増えているのに、訪問入浴の事業者は増えていません。そのため、競争原理が働かず、結果的に現状にあった顧客ニーズが満たされていないのではと疑問を持ちました」

福島代表取締役社長は、同社が掲げる「健康的なシニアライフの創造」を重度の要介護者でも提供できるような訪問入浴の特性を活かして状態改善につなげるためにnagomiのリハビリのノウハウを取り入れた。しかし、入浴後に行う可動域活性化プログラムは提供に8分かかる。そのため、1件あたりのサービス提供時間が長くなり、1日あたりの利用者数は減り、売り上げは下がる。そこで、浴槽



機能美にもこだわった浴槽



同社のスタッフ。お揃いのオレンジのユニフォームは特注品だ

の軽量化・構造の見直しを図ることで、運搬などの作業時間の短縮を企図した。

早速、金物の加工を得意とする有限会社河野電機と浴槽を共同開発。浴槽と別体であった金属担架を廃止し、浴槽へ内蔵することで部品点数を減らし作業効率化を図った。また本体素材にカーボンを採用し軽量化することでスタッフの業務負担軽減も狙った。全体的なフォームは入浴するヒトの体型に合わせて流線型とした。

「私は1995年から訪問入浴の仕事をしており、そのなかでほしいと思った機能を詰め込みました」と、福島代表取締役社長は胸を張る。色は元気が出るビタミンカラーのオレンジを基調とした。

マイナスイメージを払拭 介護人材確保にもつなげる

さまざまな工夫を施した「re:CRAS」だが、後発だけに知名度を伸ばすため、同社は2015年度グッドデザイン賞にエントリー。9月に受賞が決定した。

早速、パンフレットやホームページに「受賞した」と記載。営業時に

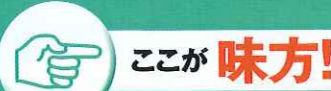
パンフレットを渡すと、ケアマネジャーに取り組み姿勢を評価してもらいやすくなったという。その結果、紹介が増え、サービス開始から1年で利用申込件数は300件を超えた。

さらに、訪問入浴が持つマイナスイメージの払拭にもつながっている。介護サービスのなかでも訪問入浴は重労働なため、人材が不足しやすいが、イメージアップにより、人材確保を狙う。

当初の「リハビリ訪問入浴を通じて利用者を以前の状態に戻す」という目標も着実に達成できている。この1年間で約25人が卒業できたといい。たとえば、同グループのリハビリデイサービスnagomiの利用者が、ADL低下に伴い、「re:CRAS」を利用するようになったものの、利用していくうちに状態が改善され、再び「nagomi」を利用できるまでになったケースもある。

在宅の高齢者の増加に伴い、需要が見込まれる訪問入浴。それに対応するためにも、福島代表取締役社長は、「今後5年間で35店舗150車両まで増やしたい」と抱負を語る。

COLUMN



ここが味方!

ヒト・メニュー・ツールを 一体革新し 新境地を開拓

ほかの介護サービスに比べ、これまであまりサービス内容が進化しなかった訪問入浴分野において、株式会社リクラスはリハビリプログラムの導入や浴槽開発にて、ヒト・メニュー・ツールを一体革新。新たなビジネスモデルをつくり上げた。それにより、利用者は入浴による快適性だけでなく、重度化防止や状態改善の効果も得られるようになった。さらには、スタッフの業務負担軽減ややりがいの創出も実現できた。介護人材不足が深刻化するなか、魅力あるサービスを自らつくり出すことで、その解決を図ったと言える。

© teracreonte - Fotolia.com